

# アメリカ先住民シャイアン族の成熟儀礼

## Puberty Rites among the Cheyennes of Native American

藤崎康彦

### 目的

本稿はアメリカ先住民、平原インディアといわれるグループに属するシャイアンの成熟儀礼 (puberty rites) について、女の比較を行なうことを目的とする。その意義は次の諸点にある。

① ホーベルは、シャイアン族の少年には成熟儀礼はないとした (Hoebel 1960:99)。それに対して、少女には明瞭にある。果たしてこのホーベルの理解は適切かどうか、資料に基づいて検討する。

② なぜ少年の成熟儀礼の有無を問題にするかは、ベルダーシュ (シャイアンでは、ホーベルの表記に従えば「hemaneh」(op.cit.:83) と呼ばれる。意味は「半男・

半女」ということである) の理解に関わる。シャイアンでは特定の家族的グループからこの「半男・半女」が出るとされるが、例えば南西インディアンに属するモハーベのベルダーシュなどとはその点で異なる。そこではある少年が大人になる過程で通常の男性の通過儀礼の過程から外れることでベルダーシュという地位が社会的に認められると理解できる (藤崎 2009)。仮にホーベルのいうように少年には成熟儀礼 (一般に大人の地位の取得についていうことが多いが、現実にはある特定の社会組織、日本なら例えば正式に「村」や、結社例えば「講」などに加入することで大人と認められる場合がほとんどなので (藤崎 2009、2010)、「イ

ニシエーション」、「加入礼」ということも多い) がないとしたら、モハーベ的な「ベルダーシュのなり方」はシャイアンにおいては不可能である。成熟儀礼がないことと、家族的集団から「半男・半女」は生まれる (あるいは選出される?) という理解は論理的に互いに矛盾することなく整合的である。少年の成熟儀礼はないから、特定の家系の出身者を指定するということになるのだといえるのかも知れない。それを考察する前提としてやはり確認が必要である。

### 2 用語と概念

これからの資料を検討する際、どうしてもシャイアン族 (のみならず平原インディ

アン一般に) 関して、理解しておく必要がある基本的な概念がいくつかある。先ず先にそれらを説明しておきたい。

## 2—1 「give away」

日本語に直しにくい言葉である。シャイアンの家族に何か喜ばしい、祝うべき事がある時など、家族、あるいは一族の主が小屋(普通一般的な言葉として使われる hut に対応する訳語としてこう表現したが、英語文献では lodge、hut、tent なども使われる)の前に出てその慶事の内容を述べ、馬を誰それに与える、と人の名を指定する。その人は男女を問わないが普通貧しい人で、馬を受け取ると馬を与えられた理由、すなわち与え手の喜ばしいことを歌のように語りながら、キャンプ中を触れ歩く。与え手は、大抵はその後祝宴を開き、人々を招きもてなした後、様々な財を来訪者に分け与える。このような行為全体を指す概念である。特に馬を与えることはこの行為に必須である。これから検討する資料においては、

男の子が初めて狩で獲物をしとめた時、初めて戦に出た時、戦で(特にその初陣で)手柄を挙げた時、女の子の初経の時、生後適切な時に耳にピアスをする時、などになわれている。気前よく財を分け与えても、北西海岸インディアンのポトラッチのように威信誇示の競争的な行為ではない。従って、日本語ではこの行為の全体に対応するぴったりした言葉はない。資料で「馬を与えた」などある場合はこの行為であると理解して頂きたい。強調すべきであると筆者が見ることは、この行為は、それが行われる対象の行為あるいは存在を、私的なものでなく公的なものとして性格付けることである。

関連して「貧しい」についても述べておきたい。シャイアンは固定的な階級のない社会であるが、家族間の貧富の差はある。グリネルは次のように述べる。「家族の格づけは、他のインディアンにあるようにシャイアンにも存在するが、その家が最良の家族成員によって維持されているという評

価に依存している。立派な家族というのは、勇敢な男達と思慮分別のある女達を輩出して、多少なりとも財産を有している家族である。一人の勇敢で成功した男が彼の家族を低いところから極めて高いランクに上昇させることがある。あるいは無能な男達の一代代で、ある家族が没落してしまうかも知れない (Grinnell 1923a:129)。」シャイアンの財産の根本は馬と、狩によるバッファローの肉や皮である。馬は基本的に他の部族と奪い合いをしているので、男が馬とバッファローを獲得し、女がバッファローの肉と特に皮を加工して様々な衣類などを作り出すことが富の源泉である。勇敢な男と働きの良い女がいて、かつそれらの富をキャンプの人たちと分かち合うことが尊敬を受けるあり方である。従って、貧しさは、不幸にして有能な男達を戦で早くに失った家族や、怪我をしたり年老いたりして十分な働きができない上に頼るべき親族が少ない場合などに生じるであろうことが想像できる。裕福さによって、社会的行動に

差が出ることがある。たとえば、後述するが、「耳の穴開けの儀礼」などにそれを見ることが出来る。

## 2—2 「count a coup」あるいは

### 「count coup」

「クーを当てる」とか「クーを取る」とかと訳している。平原インディアン部族間抗争においては、相手を殺すより、相手に勝る勇気を示すことに、価値が置かれていた。それが「クーを当てる」ことである。これは「クー・スティック」といわれる棒や、手持ちの武器、時には素手で相手の体に触れることである。戦で、敵を馬で追って、最初に相手に触れる（打つ）ことなどは最高の名誉となる。

この行為は相手が生きていなくとも成り立つ。相手を殺した人は、それが手柄なので、クーを当てる必要はない。他の人が倒れている相手に触れるのである。三人までクーとして数えられるらしく、いわば一番手や三番手の「クー当て」として（威信は

同じではないだろうが）認められる。

また、必ずしも男の戦士でなくとも、敵のグループの者であるなら女性を殺してクーを当てることもあるようだ。従って、「クーを当てた」と資料にあっても実際にはどういふことなのか明瞭でないことは、少なからずある。

## 3 資料

目的の①で述べたことに従い、(少年との比較のために) 先ず少女の成熟儀礼を確認する。グリネルに従い引用もしくは要約して紹介する。

### 3—1 少女の成熟儀礼(通過儀礼)

グリネルによれば、「子供時代から成人した若い女性への少女の移行は、彼女の家族そのものにとつと同様に部族にとつても重要な関心事である。彼女は今や、子供の母になるはずであり、母になることで部族の成員を増加させ、そうすることで部族の勢力と重要性を増す存在なのである。

若い少女が成熟の年齢に達し、初経をみると、彼女は当然母に知らせる。母が今度には父に伝える。このような重要な家族的出来事は秘密にされることはない。裕福な家庭では少女の父は小屋の戸口に立って娘の慶事と、その祝福のために馬を「give away」することを公に宣言する。

#### — 中略 —

少女は髪を解き湯浴みする。その後、年長の女性が少女の体全体を赤く塗る。そして、裸の体にロープをまとった状態で少女は炉の脇に座る。炭が炉から取り出され、彼女の前に置かれる。「sweet grass (浄めに使われる草である以外不明)」や「juniper needles (ネズの針葉)」や「white sage (おそらくヤマヨモギの一種)」を炭の上に撒く。少女は炭の上に覆い被さるように体を寄せてロープを広げる。香草から立ち上る煙がロープに籠もり彼女の周りを通して体全体を包むようにする。それが終わると彼女と彼女の祖母は、近くの別の小さな小屋に行つて、そこに四日間籠もる

〔Op cit.:130〕。

また、「四日の籠もりの終わりに、祖母は炉から炭を取り出し、その上に先の三種の香草を撒き、ロープか布にくるまれた少女に炭をまたぐように立たせ、煙で浄める。これで通常の社会生活に復帰する。この最後の浄めは若い未婚の女性の場合には必ず行われる (ibid.) といふ。

その後、この儀礼を経た女性には、特別なものを身につける。シャイアンの(既婚の)若い女性と(未婚の)娘は「保護綱 (protection rope、あるいは protective-string、グリネルは本文では前者を、索引では後者を Grinnell 1923a, 1923b において用いている。またホーベルは「貞操帯」とも訳すべき「chastity belt」という表現を用いている。Hoebel, Llewellyn and Hoebel)」を身につけていたが、(グリネルの調査していた時代においても)彼らのほとんどが変わらずそうしている。これは細い綱ないし紐で、腰に巻き、下腹部の前で結び目を作り、股の間を後ろに通し、枝分かれした

綱ないし紐それぞれを腿に巻き付け、ほとんど膝のところまで届かせる。この綱を身につけることは幾分動きを制約するものではあるが、しかしそれをつけていても自由に歩き回することはできる。これは夜は必ず、昼でも家の外に出るときには必ず身につける (Grinnell 1923a:131)。

この「保護綱」はそれを身につけている女性に対しては完全な保護となり、成熟の時期を迎えた後は直ちに娘はこれをつける。老若を問わずすべての男たちはこの「保護綱」を尊重する。それを冒涇するものは女性の男性親族から報復を受ける。このような報復の例はグリネル (ibid.) もホーベルとレウエリン (Llewellyn and Hoebel:176-77) も記している。

この「成熟儀礼」を受けるべき初経は(平均的に)いつ頃かは明示されていないが、十四ないし十五歳くらいではないかと思われる。後ほど男の子の育ち方の所で詳しく見るが、キャンプでは男の子も女の子も、幼い子もある程度大きい子も、一緒に

なって大人の活動そのものを真似る「ままごと」遊びなどをして遊んでいる。十二歳頃までは男の子も参加しているが、それ以降はこういう遊びから離れ、小動物ではなくバッファローの狩をやるうとし始める。女の子は十四、五歳までこういうままごと遊びをしている (Grinnell, 1923a:110-111)。大人の女性になる (womanhood に達する) ことで、もう「ままごと」はしなくなる(できなくなる)だろう。

この後は婚姻可能な娘として、家族のもので行動を見守られながら過ごす。シャイアンの結婚の仕方は、非常にきちんとした手順を踏む、形式張ったものである。時間もかかる。相思相愛になっても五年くらいは時間がたつことは稀ではない。正式な結婚と駆け落ち的な結びつきとははっきり区別され、後者は嫌がられる。これはシャイアンの社会の構造に関係している。(多くの前近代社会でそうであるように) 結婚は家族やキンドレッドなどの集団と集団との結びつきを形成するものである。シャイア

ンでは娘の結婚に強い（むしろ父親のそれより強い）決定権を持つのは娘の兄弟や、類別的な兄弟に当たる従兄弟である。ひとたび結婚が成立するとそれら男性親族は姉妹の夫と義理の兄弟として親しく強い絆を形成する。一つのキンドレッドの男は自分のそれのみならず姉妹の夫たちや、妻の兄弟を通じて彼らのキンドレッドの男達とも連帯できるのである。これがシャイアンのような、男達は戦士あるいは狩人として常時臨戦態勢に置かれている社会において、どのような意味を持つかは容易に想像できであろう。

また、このことがグリネルが「子供時代から成人した若い女性への少女の移行は、彼女の家族そのものにとつてと同様に部族にとつても重要な関心事である」という理由の別の面である。結婚は男たちの連帯の結節点になり得るからである。近代家族の中で生きているわれわれには実感しにくいのが、本来シャイアンのような社会では公と私の対立は希薄であらうと思われる。家族、

キンドレッド、バンド、部族全体といううになめらかに人々の繋がりは形成され拡大していく。一つの小屋の中で夫婦と子ども、核家族的な単位は存在するが、それは決して閉ざされたものではなく、親族やキャンプの他の家族や人々と開かれた繋がりを形成している。少女の女性としての成熟は、そのままキンドレッド、バンド、部族全体の中で意味づけられるのである。少女の成熟儀礼はその意味で、社会的儀礼である。

### 3—2 少年の成長過程

論理的な対比では「少年の成熟儀礼」とすべきところだが、現時点ではそもそも少年に成熟儀礼はあるかを検討することが課題になっているので、このような小見出しとしておく。資料を見ても、確かにここで明確な儀礼を受けるといふところを確定しにくい。しかし、私の見るところそれは「ない」のではなく、個々の少年ごとに段階を踏んで達成されているのであり、それ

故に少女のように「ここ」と明確な時期を特定しにくいだけなのである。あるいは、後ほど論じるように、生活そのものが通過儀礼なのである。

資料のあちこちから引用するよりも、一人の少年の成長過程を伝記的にたどつて全体のイメージを先ずつかみ、それから関連する情報を補足してより精密に分析する形を取りたい。

### 3—2—1 あるシャイアンの若者の語り

シャイアン族の *Wiss* と名付けられた少年が大人になってゆく姿をグリネルが描いた、美しい叙事詩のような文章がある。『バッファローが駆けていた頃』というこの小さな本 (Grinnell, 1920) は一九二〇年に出版された。話しは語り手が生きてきたその（出版年の）七〇年前のことから描いているので、一八五〇年頃以降のシャイアンの生活と考えられる。以下この自伝に従って、要約的に若者の成長をたどってみる。本には様々なエピソードが含まれているが、

少年が大人（男性）になる過程に関わりの深いところを重点的に紹介する。

Wikisの語りは次のような印象的なエピソードから始まっている。（母から聞かされたことでもあり、本人の記憶は夢のようではっきりしないらしい。しかし本人が思い出せる最初の記憶である。）語り手のWikisが五歳か六歳の頃、キャンプが他の部族に襲われた。彼は他の子供たちと遊んでいるところだった。母親はWikisを連れてテントに戻り、幼い妹を背に負い、Wikisの手を引いて川を渡って対岸に逃げようとした。Wikisはまだ幼くて、引きずられるようにして走っても疲れて動けなくなったようだ。母親はこの時のことを何年もたってからWikisに時折笑いながら語ったという。Wikisは母に、背中を放つて、自分をその代わりにおんぶしてくれと頼んだのだそうだ。しかし母はまた、よく次のようにも言っていたという。もしどちらかの子供を放棄しなければならぬ状況に迫られたら、Wikisこそがその場に置いて

いかれたはずであると。Wikisは男の子なので、大きくなって戦士になって、部族の敵と戦うはずであるが、いずれ戦いで殺されるであろう。それは早いか遅いかだけなのであると。

ここで、男の子達がどのような環境に置かれ、どのような期待を持たれているか明瞭に判る。それは父や祖父などの男性親族から厳しく躰けられることなく、むしろ最も身近な女性親族を通じて、いわば人生の最初期において刷り込まれる価値なのである。例えば次のようなエピソードも描かれている。

Wikisの祖母は、テントの中で皮なめしなどの仕事をしているとき、そばにいる幼いWikisに彼の父と祖父のことをよく話してくれた。父や祖父はどちらも戦で既に若くして亡くなっているのであるが、彼らがいずれもいかに勇敢で、皆から尊敬されていた戦士であったかを祖母は語る。そしてWikisに男の為すべきことで最上のは勇敢であることだと諭す。彼も敵を恐れず

勇敢に最善を尽くすように、そして父も祖父もいないので、身内のものがいかに為すべきか教えてくれると言う。Wikisの父親代わりで保護者であり後見人であるべきその人はオジであった。

以下要約して紹介するが、「」の発言部分は引用にあたる。しかしここでは一々原文の引用箇所を示すことは省いた。（）内は筆者の補足である。また途中筆者のコメントも括弧に入れずに挟んであるが、文脈から明らかに区別できるはずである。

Wikisが十歳くらいになると、オジが色々と教えるはじめ、ある時彼を狩りに連れ出してくれた。バッファローではなく、ウサギか、せいぜい鹿くらいの小動物の狩りから訓練を始める。（もちろんもつと小さいときから、遊び道具として弓と矢はこのオジから与えられているのである。いよいよ、本格的な訓練をオジは与える時期だとみたのである。）そのときに色々男としてどのように振る舞うべきかをオジは甥に

教える。(このオジは父方のオジであると思われる。その場合類別的な父に相当するので、Wikisに話す時も「息子よ」と語りかける。)このときも狩りの道々、男としての振る舞いを諭される。日常の規律は大切だが、それ以上に大切なことは「勇敢であることだ。いずれ戦の遠征に出るだろう。その時おまえは常に戦の最前線にいるようにしなければならない。多くの敵を討つよう懸命にならなければならない。常に自分に私は勇敢だ、私はなにも恐れなと言いつて、男として認めてくれるだろう」と教える。

このようにして実地に厳しい教えを受けて十二歳になった頃、皆に評価されるようなことができた。賢い性質のために大人でも射止めることが難しい大きな鶴を射止めたのである。キャンプに戻るとオジは「鶴をしとめたことのない大人も沢山いるのによくやった。これは皆に知らせたい」と言

った。

こういう、功績をキャンプの皆に知らせ、賞賛するやり方は定式化されている。先に述べた「give away」である。オジは貧しい老女を呼び馬を贈り、Wikisの成果を語って聞かせた。老女はWikisの行為を讃える歌を歌いながら馬に乗ってキャンプ中を回る。オジにこのようにしてもらったWikisは誇らしい満足感を味わうのである。この後オジは新しい、さらに強い弓を与えられた。Wikisはそれを使っての鍛錬を怠らない。

次の年の夏、Wikisが十三歳くらいであるが、Wikisはオジにバッファロー狩りにつれていってくれるよう頼む。自分ももう十分に大きな少年なのだから狩りに出て大丈夫だという。オジはしばらく考えて、「息子よ、狩りを始めるべき時だと思う。男のやることを何かやるには十分な年になった。私はずっとおまえを見守ってきた(観察してきた)。私はおまえが弓の使い方を身につけたことを知っている。次にバッ

ファローを追う機会に一緒にくるとよい。どれくらいやれるかみてみよう」と言って賛成してくれた。

間もなくバッファロー狩りがあった。Wikisも参加し幸運なことに二頭の子牛を矢でしとめることができた。オジは前と同じようにキャンプ中に息子であるWikisの功績を「give away」によって誇らしく触れる手配をした。年老いて足の悪い貧しい男に馬を贈り、触れ回らせたのである。その後、友人を招いて宴を開き、息子の幸運を共に喜んでくれるよう友人たちに狩りの様を語ったのである。客たちも賞賛の言葉を与えてくれた。

次の機会にWikisはオジに子牛ではなく、大人のバッファローをしとめるよう指示される。実際にオジと狩りに出るとWikisはおびえて逃げ出したくなるが、オジがそばで誘導して射るよう励ます。ついにWikisは雄牛を射る。彼は自分のなしたことが最初は信じられない。しかし、何事か大したことをやったのだと感じる。オジの力を借

りたとはいえ、まだほんの子どもなのにと  
も思いながら。解体して肉と皮を持ち帰っ  
た時、母も信じられない思いで驚く。オジ  
は「もうおまえは男になった。狩りをして  
獲物を殺すことができる。男がやるように  
おまえもやらなければならない」と言った。

このように導かれて有能な狩人になって  
ゆくが、Wilks本人は戦に出たくてしよ  
うがない。「私はもう若者になっていた。戦  
にいくことをますます考えるようになって  
いた。小さいときからずっと私は仲間の少  
年たちと、我々の父やオジたちがやったこ  
とをしてしかるべきくらいに十分大きくな  
っている時期について語り合ってきた。私  
たちがやりたいと最も願っていたことは  
敵に対する戦いに出て、何事か勇敢なこ  
とを為し、人々から尊敬されることであっ  
た。」そしてついに戦に出る日が来る。

Wilksが十五歳になっていて冬も深まっ  
ていた頃、Wilksたちの集団は大きな川の  
畔にキャンプしていたが、その近くには  
（互いに友好的で若者同士の交流もある）

アラパホ族（Arapaho）の村もあった。あ  
る日アラパホとシャイアンの若者たちが  
（常に敵対している）クロー族（Crow）の  
村（キャンプ）に戦にいくことになった。

戦と言っても彼らの不意を襲い、気づかれ  
ぬように彼らの馬を奪ってくることなのだ  
が、敵が気づけば当然戦闘になる。Wilks  
はこれについていった。宴会をしていて油  
断をしているクローのキャンプに入り、宴  
会に行って誰もいないテントから立派な弓  
矢と簞、そして他に馬も一頭奪ってくるこ  
とができた。他の若者たちも馬を奪ってい  
るので、クロー族はWilksたちを追撃する  
ことができず彼らは無事に凱旋する。遠征  
集団のリーダーからも幸先の良い初陣だっ  
たと高く評価され、立派な戦士になるだろ  
うと褒められた。オジも褒めてくれた。  
（勇気を持って敵の村に入り）立派な弓矢  
を奪ってきたことは馬を奪うことに勝ると  
賞賛し、（おそらく大きい強い弓なので）  
Wilksがその弓矢を敵との戦いに使うこと  
ができるようになることを望んでくれた。

これが彼の初陣だった。

その冬が去り夏になった時（おそらく十  
五歳か十六歳であつたらう）、オジが銃を  
与えてくれた。Wilksは自分が真の男なの  
だと感じるようになっていた。

その後の二年間（おそらく十六、七歳位  
からの二年間）でWilksは五回、戦に出た。  
最前線の戦士としてではなく、戦士の付き  
人としての出陣であつたようだが、幸運な  
ことにそれなりに功績を挙げた。五回のう  
ちで、誰よりも先に敵にクーを当てたのが  
一回、敵のキャンプに忍び込み、馬を盗み  
出したことが三回あつた。（これらの功績  
によって、一人前の）立派な戦士と見なさ  
れる時がきたとオジもその他の親族も賞賛  
し、幸運を喜んでくれた。

Wilksはこのような幸運は先の最初の戦  
の後、親族の老人の指導を受けて「世界を  
支配している諸霊を満足させる犠牲的儀  
式」を行ったことで得られたと思っている。  
これは丘の上に行き、一人で自分の肉を切  
り裂く苦行を行って、啓示を求めることで



ある。Wiksの場合は、呼びかけた諸霊の使者として狼が夢に出てきて指示を与えてくれた。戦での幸運はこの狼の言う通りにしてきたからだとWiksは思っている。

このようにして、成熟した男だという自覚をWiksは持つようになった。実際何歳くらいになっているのかは、記述からは明瞭ではないが、時期的には上記の戦の出来事から、さほど年月はたっていないと思われる。むしろ問題は、「自分は（一人前に成長した）男だ」との自覚が（彼位の）若者ならする事は何でもできるという能力の自覚と結びついていることだ。良い狩人である。自分の馬の群を保有している。戦にも出ている。参加した襲撃の指導者にも誉められている。こういうことが、年齢とも相まって、娘たちのことを考えてもよい資格があるとWiksに感じさせるのである。

Wiksはいつかは結婚し自分の小屋と家庭を持ちたいと思う。思いを寄せる娘との結婚を夢見るにつけ、ますます妻にふさわしい男になる、つまり戦で大きな功績を挙げ

げ、妻が夫を誇らしく思うような存在になりたいと思うのである。

この後間もなく彼は脚に怪我をし、戦士としても狩人としても働けず悶々とする二年間を送る。ついにオジに相談し、これ以上生きていてもしょうがないので殺されるのを覚悟で戦に出たいという。（これはむしろ敢えて殺される為に戦に出ることで、他者の手にかかって実現させる一種の自殺である。シャイアンではこれは社会的に認められた行動様式で、様々な動機で行なうことがある。たとえば、ある娘の兄弟による彼女の配偶者の選択を当人が承知せず、面子を失う思いをした兄弟が、死を求めてこのような行為に出ることは、稀ならずある。）オジはWiksが戦で殺されても嘆かないという。それが男が死ぬべき姿（男のあ

るべき死に様）だからだ、といって賛成する。間もなく若者達のグループが戦にゆくことになり彼もそれに加わる。リーダーには覚悟を伝える。オジは自分の最良の戦闘馬（平原インディアンは戦に出る時は二頭

の馬でゆく。会敵するまでの移動用の馬と、いざ襲撃する時に乗る戦闘用の馬は別で、移動の時には戦闘馬は引いて行く）と自分が使っていた聖なる被り物を与えてくれた。被り物はサンダーバードの羽根が使われている（貴重な）ものだ。彼は普通の戦士が持つ武器（弓矢、槍、銃など）は持たず、祖父から父へと何代も経て家族に伝わっている石斧のみを持った。この戦いでWiksは殺されるどころか、獅子奮迅の働きをして勲功を挙げ、リーダーから最も勇敢な戦士として賞賛される。

キャンプに戻っても皆が賞賛してくれる。オジは「敵に体を与えた、殺されることを望んだ、しかし偉大なことを成し遂げ、生還したこの息子を見よ」と大音声を挙げ、人を呼び最良の馬を与えて（「give away」して）喜びを触れさせた。その夜はキャンプでは「頭皮踊り（scalp dance）」が行なわれた。脚が不自由でまだ踊れないWiksは顔を黒く塗る戦士の姿で、ただ座っているだけではあったが参加した。

その後次第にWikisの脚は良くなり全く

日常に差し支えないまでに回復する。今まで通りに、他の若者同様に動けるようになった。その頃の夏に、部族の戦士結社（部族全体で十ある）の一つに加入した。この時もオジの助言に従い、オジが既に加入していた結社に入った。（結社の加入には特別な加入儀礼は伴わず、かつ所属変更も可能である。大抵の若者は加入するが、それが何らかの社会的地位の変更を意味するものであるとは、グリネルやホーベルいずれの資料によっても考えられない。ただし、その結社の指導者であることは社会的威信につながる。）

回復した後、時期ははっきりしないが恐らく二十歳過ぎくらいになっているのではないかと思うが、彼は長い間想っていた女性と結婚する。数年間は幸せて平和な生活が続いたが、次第に白人の侵入が始まり白人との抗争が起こる。その後のことは良くないことばかりで、何も語りたくない、だから私の話もこれで終わりだとして、グリ

ネルへの語りも終る。

### 3—2—2 補足

グリネルが記録したWikisのこの自伝に、彼の他の著作からいくつか補足を加えておいた方がよい。

#### 3—2—2—1 乗馬について

主人公の記憶は五歳くらいからしかないが、それ以前のシャイアンの子どものあいり方で特徴的なのは、乗馬である。少年達（少女達も）は歩くことができるのとはほとんど同じくらいに早くに馬に乗ることができようになる。赤ん坊の時から馬とその動きに慣れていて、二歳か三歳の子どもなら母の前で馬のたてがみにつかまり、あるいは母の後ろで母にしがみついて馬に乗ることはしばしばある。このようにして自信をつけ、バランスを学び、歩けるのになるのと同じように実践を通じて馬の乗り手になる。五歳か六歳になる頃には少年達は年の若い子馬の鞍をつけていない背に乗って

いる。これができて暫くすると、ボニーの群れの番をしに丘陵に出て行く（Grinnell 1923a:109）。

#### 3—2—2—2 弓矢について

小さな男の子が容易に走り回るようになるのとすぐに、父やオジや年長の兄などがその子に小さな弓矢を作って与える。励まされ、少年（というよりほとんど小児に近いのではないかと思われるが）は練習に多くの時間を割く。段々慣れてくると同年配の子ども達と小鳥を射止めに出かける。力や技能が上がると草原に出て、兎や雷鳥や七面鳥すら狙う。八歳ないし十歳の子なら（枝にとまっている）小鳥を射止めることができ、時には飛んでいるものも打ち落とすことができるくらいになる（op.cit.: 114, 115）。このようにしてみると、Wikisがオジから十歳頃に弓を使う狩の手ほどきを受け始めたのは決して早いわけではなく、既に彼自身も仲間達と初歩的な狩の経験は十分に積んでいたと思われる。

### 3—2—2—3 遊びについて

少女の生活のところででも触れたが、子ども達の遊びはほとんど全て大人の行動の真似である。ままことも「まねび」というべき学びである。しかし男の子は段々と男の子だけで群れて（同年配同士であるいは年長少年に引き連れられて）狩や戦のまねごとをするようになる。棒にまたがって馬に乗っているつもりでバッファローや敵の役の子供を追い、弓矢も使って実戦的に遊ぶ。模擬戦なら敵にクーを当てる真似もする。そこに「ままごと」の延長で少女達も加わって、母親や女性役として相応しい役を演じることもある (opci:ijit). それらの活動が実際に大人並み、あるいは同世代の仲間並みにできるようになる時が、男の子にとって意味のある時なのであろう。

### 3—2—2—4 「犠牲」について

地面に一本立てた柱に紐を結びつけ、その端につけた串を両胸の皮膚を裂いて肉の下に通す。胸と柱を結んでいる紐を引っ張

るように柱と反対側に体を傾けて胸に体重をかけ、胸の肉を裂く。その間自分に力を与えてくれるよう、願いを祈り続ける。そういう苦行を *Wige* はある時一人で（老人の指導は受けて）行なった。その時に夢幻様状態で狼が現れ、一種の守護霊のように、色々と教えを与えた。首飾り (necklet) に結びつけている包みの中に狼の毛を（あたかもお守りのごとく）少し入れておくようにという指示も与える (opci:ig). このような苦行は部族の大きな祭りの「Sun Dance」のときに最も盛んに行なわれるが、このような苦行や、そこでの意識変容、意識変容の中での守護霊的な存在との接触の経験等々は、全く通過儀礼的な意味は持たない。サン・ダンス自体がそのようなのだが、多くは個人的な理由から「御利益」を期待して誓願する行為である。資料では *vow* とか *pledge* とかの言葉が使われている。例えば、身内に重い病気の者がいる時など、もし無事回復することがあればサン・ダンスを開きますというように、あたかも祭りを

寄進するような感じで誓約するのである。*Wige* の場合も、アニミスティックな超自然的存在から自分に力を授けて貰いたいという動機による行為であって、通過儀礼における「死と再生」の意味を持つような苦行ではないと思われる。

## 4 考察

本来ならば、成熟儀礼に関して記述してきたところについて、男女の比較のまとめをすべきだが、紙幅の余裕がない。読者はそれぞれの特徴を明瞭にこれまでの記述から理解できるであろうことを前提に、当初の問題意識に直ちに進むことにする。

### 4—1 少年には成熟儀礼はないか

少年に成熟儀礼はないというホーベルの論拠を先ず改めて確認しておきたい。ホーベルは次のようにいう。(一) 内は筆者の補足である。「」内はホーベルの原文の中では(一)で示された彼の補足である。ゴチックは原文ではイタリクスである。

「シャイアン文化には少年の為のイニシエーションあるいは成熟儀礼はないことを認めることはまた重要なことである。シャイアンの子ども達は業績によって完全な大人の地位を獲得する。長老達によるしごきを受けるとか、なんであれ他の形態の通過儀礼（強調ホーベル）を受けるとかする必要はない。この事實は、耳に穴を開ける「開けられた穴」には、シャイアン達が身を飾るのに大層好むリングをつける」時期に明らかに示されている。世界の多くの地域では、この行事は成人の儀式の一部となっているであろう。飾りを付ける特権は大人の地位を示すものである。シャイアンに関しては、そうではないのである。耳は儀礼的に三歳から六歳の頃に穴が開けられる（傍線強調は筆者）。この行為は部族的な儀礼の集会の時に行なわれる。子どもの耳に穴を開ける榮譽ある人を、呼び声を挙げる人を通じて、父親が呼ぶ。呼び声を挙げる人はキャンプ中に触れ回るのである。耳

に穴を開ける人は、（儀礼的に）クーを当て、自分の仕事をし、馬やその他の財物の気前の良い贈り物を受け取る。

(Hoebl 1960:99-100)』

しかしまた、この文章にすぐ続いて、「もしシャイアンの少年にイニシエーションというものがあるとすれば、それは少年の最初の戦の遠征（初陣）のときに生じるのではないか、と言う人もいるかも知れない (ibid.)」といって、グリネルの、初陣で幸先良く手柄を挙げた時には家族の喜びと誇りとなり、そうでなかった少年達の尊敬と賞賛の的になるという一節 (Grinnell 1923a:122-23) を引いている。その上で（グリネルの記述に従い）このような少年は新しい名を付けて貰い、今や確かに立派に一人前の大人なのである、と述べて記述を打ち切っている。すなわち、自説へのこのあり得べき反論へのホーベル自身の態度は曖昧で、成熟儀礼はないという見解を撤回してはいない。そのホーベルの論拠を明確化してみると、次のようになる。

① 「シャイアンの子ども達は業績によって完全な大人の地位を獲得する」、つまり大人と同等の能力が付いた時が大人と認められる時である。

② 成人を画する明確な儀式がない。長老達によるしごきを受けるとか、なんであれ他の形態の通過儀礼を受けるとかする必要はない。

③ これは②の定式化の系としての論拠になるが、他の文化での成熟儀礼でよく見られる「耳の穴開け」が幼少時に行なわれている。

しかし、ホーベルの議論は意図的にかは判らないが、恐らく彼も依拠しているグリネルの記述を誤解ないしは誤読しているのである。例えば、グリネルはピアシングについて概略次のように言っている (op.cit.: 105-06)。

① 幼児が三ヶ月ないし六ヶ月になると（強調は筆者）子どもの耳にピアスする。

② 何か大きな祭り（ダンス）のあるときにその機会を捉えて行なう。

③ ピアスを行なう人は男性で、戦での手柄を語り、クーを当てる（真似をする）（強調は筆者）。

④ 父親は謝礼として（同右）一頭から三頭の馬を与える。

⑤ この（右記③の）儀礼を行なわずに子どもにピアスすると、子どもに愛情を抱いていないと人々は噂し、キャンプの中では醜聞となる。

⑥ 子どもをととても愛していて、経済的にも余裕のある父親は、一回だけでなく、異なった男性の手で二回かあるいは三回もする。その度にそれぞれ馬を与える。

⑦ （昔のことではあるが）豊かな家では、子供が生まれる前にこのピアスすることすらある。大きな儀礼（ダンス）の時に、人形を作り、儀礼的に（つまり③のやり方で）その人形の耳に穴を開けて貰う。

グリネルの説明からほとんど誤解の余地

なく読み取れるこの「耳の穴開け儀礼」の意味は、「子どもを生まれたその家族、ひいてはシャイアン社会の成員として正式に認知すること」である。もちろん子への親としての愛情が基本なのであるが、誰もがこの儀礼を子どもに受けさせる。ただ単に耳に飾りを付けるための穴を開けるという実用的な行為ではない。儀礼を経ないと子どもに対してしかるべき扱いをしていないと（陰で）非難されるのである。新生児が最も脆弱で死にやすい三ヶ月を節目にして、ひとまずこの世に留まることができそうだという見極めが付いた頃に行なうのは、このことを明らかに示している。その意味で、これは「成熟儀礼」ではないが、明らかに重要な通過儀礼なのだ。

一般に、子どもを少なくとも生まれたその家族の成員として正式に認知する行為は、他に「名付け」が考えられる。シャイアンでは幼い時には正式な名では呼ばず、愛称（pet name）で呼ぶ。五歳か六歳くらいになると正式な名で呼ばれる。男の子も女の

子も父系親族に由来する名を付けられる。しかしこれは、その間仮の存在として社会的には扱われ、正式な名付けの時初めて親族や共同体の成員として認知されるというのではない。正式の名付けは実は生後まもなく行なわれていることもあるのである。グリネルによれば、「正式な名は子ども達が六歳か七歳になる頃までには必ず与えられる。時にはずっと早くに与えられることもある。子供が生まれて間もなく、父の義理の兄弟（姉妹の夫などであろう）か（父の）父が子どもを迎えにやる。子どもが連れてこられると、子を腕に抱き、その子に彼（名付ける人）の（父方親族から選んだ）名と馬を与える（op-ci:107）」。このようなことから、名付けは「耳の穴開け」と同等の意味を持つ通過儀礼的行為とは考えられない。

ホーベルは、ここで指摘した他にも、論理的に不正確な議論をしている。少年に成熟儀礼がない根拠とした三点の内、①と③

は少年固有の文化的特点とはいえないと考えられる。例えば皮なめしや、皮の彩色や、刺繍などは女の仕事だが、女性の場合、そのような技能に優れた人たちが作る結社があり、娘達は競って技能を磨き、評価を高めようとするのである。つまり女性も業績

によって評価される点では本質的に男と変わりはない。また、ピアシングもシャイアンでは男女ともに行なうものである。とするなら、残ったところの②で言っていることは、「少年（のみ）が受ける儀礼はないから少年には成熟儀礼はない」という同義反復に過ぎないことになる。彼の論拠は曖昧なままである。

では少年の成熟儀礼は何か。あるのかないのか。筆者の見方は少年の日々そのものが通過儀礼、成熟儀礼であるというものである。それを以下にまとめて述べる。その前提として、ホーベルを改めて引用する。

ホーベルはシャイアンの文化的価値と、それが人格に内面化され行動として表現さ

れるあり方とを関連させて、数学の定理をまとめるような形で、いくつかの公準（postulate）とその系（corollary）を示している。その中に次のようなものがある（Hoebel 1960:104）。

公準Ⅻ 子ども達（幼児は除く）は大人と同じ資質を有している。経験が欠けているだけである。

系1 子ども達は、彼らの（発達の）レベルに応じて、大人の活動に従事する。

系2 子ども達は大人の役割を身体（技能）的に行なうことが可能になったその時点で大人になる。

筆者はここでは完全にホーベルに同意する。しかし、ホーベルはこういう公準から「少年の成熟儀礼はない」という結論を導き出したが、その推論に筆者は異なる見解を対置する。以下箇条書きを交えて、簡潔に述べる。

① シャイアンは「耳の穴開け」の儀礼を通じて社会の一員として認知された後は、はつきりと男女それぞれの明瞭なイメージに沿って育って行き、大人になることが期待される。

② 少女には月経があるので、その時点をもて大人の女性と認められる。祝い事に行なわれる「give away」と、はつきりとした（ファン・ヘネップの意味での三段階構造を持つ）通過儀礼＝成熟儀礼が行なわれる。

③ 少年は男としての狩人及び戦士の役割を徐々に学んで行く。

④ どの少年にとっても、そして親族にとっても、最初の狩、最初の戦は特別な意味を持つ。親によつては、少年が初陣から（手柄も挙げず、しかし殺されもせず）ただ戻ってきただけで「give away」を行なうこともある。

⑤ ある時、戦で顕著な手柄を挙げる。仲間や年長者に評価され、親族（父やオジ）は「give away」を行い祝う。

⑥ このような他からの（というよりキ

ヤンプの男達の) 評価の経験の積み上げを通じて、少年自身も自分は一人前の男だという自覚(アイデンティティ)を確かなものにして行く。

⑦ 自他共に一人前の大人(戦士)だと認める状態に至る。

問題はここどこにファン・ヘネップの意味での儀礼構造が、それも公的な意味のあるものがあるのかということだろう。筆者は最もシンブルな形で通過儀礼は認められると思う。通過儀礼の一番単純な構造は、実は「往って還る」ことである。これは物語の構造論を参照するまでもなく、日常の場から出てどこかへ「往って」そしてまた「還って」来るからこそが、日常と非日常の境界を越える「通過儀礼」なのである。ほとんどその原型あるいは元型といっている。とするならば、少年達はある時から常にこの「往って還る」ことを繰り返しているのである。

バッファローはある時、突然大群で大草

原のどこかに現れるらしい。先住民達は、予測の付かないバッファローの出現の為に、夏は部族で集まり常に探索役を出して、群れの存在を把握しようとする。そして発見し次第、戦士結社のリーダーの指揮の下、組織的で大規模な狩に出る(往く)のである。これはまさに非日常の出来事で、そこに参加し疾走する大群を追うことは、危険も伴い大きな勇気を要する行為である。Wilksの経験にもそれは窺われる。そして、肉と皮を得て、キャンプに喜びと共に戻る(還る)のである。

戦は、実際は部族間の馬泥棒の行為ではあっても、敵に殺される危険は常にある。キャンプを出てそこに参加し、そして還ってくるのである。だからこそただ少年が「往って還って」ただけでも「give away」を行うことがあるのだ。そして、特に(家の余裕のあるなしも関係するが)顕著な業績を上げることがあれば、それは必ず「give away」で顕彰される。これもWilksの経験に表現されている。

本質的なことは手柄や顕著な勲功ではないのであろう。大人になってもこの「往って還る」ことは続いている。肉を得て、馬を捕まえて家族を養うことができればそれで充分立派な大人として評価される。逆説的な言い方ではあるが、「往って還る」とことがあっても日常のごとくになった時に、本当の大人であり男になるのであろう。少年達はそうなることを目指して、「往って還る」ことを最初は大いなる緊張をもって始めるのだ。(本当は、狩はともかく戦は、大人でも常に死を覚悟して出て行くもののようにだ。)

このように考えれば、大人になる日々の過程全体が、実は男にとって通過儀礼なのだ。女性の特性から女性の場合は特定の時に判りやすい儀礼が行なわれるが、だからといって少女に比べて少年に通過儀礼がないということにはならない。これが筆者の理解である。

最後に強調しておかなければならないのは、大人の男であるという自覚は他の男達

の評価に支えられなければ形成も維持もされないことである。Wikisの例で判るよう

に、同世代の仲間や、少し年長の若者や、上の世代の親族の男達によって自分の行為を認められて、初めて自信と自覚が生じている。これは戦士結社に入ってそこでの試練を通して、というようなことではない。シャイアンのキャンプという社会で形成されている。極端に言えば耳にピアスをされて、シャイアンの一員と認められた時から、この周囲の男達による評価はなされているのである。Wikisのオジの言葉に「ずっと見守ってきた」とあるのは、ただ父を失った子の親代わりの立場でのものではない。部族の男たちのまなざしで見ている象徴的な言葉と思うべきである。その意味で、男達の結びつきが社会の基本である、そういう社会なのである。

#### 4—2 「半男半女」について

人はなぜベルダーシユになるかという時、この平原インディアンなどを念頭に置いた

ステレオタイプな理解は、男性的な行為になじまない（ある面々々しい）少年などが（戦などに行くのを嫌って）なるのだ、という説明である。この理解は、シャイアンの少年のあり方から首肯できるだろうか。

筆者は、シャイアンの少年達の生活の中で、そこから離脱して、男達とは異なる存在として自己形成して行く余地をほとんど想像できない。男の子ならば皆戦士に誘導して行く社会の仕組みがしつかり機能していて、そこから離脱する可能性があるとは思えない。仮に女々しい少年がいてもその存在は許容されないし、役割に適応できないとしたらいづれ狩や戦で淘汰されてしまいうだけであろうと感じる。

だからこそ特定の「家族的集団」から「半男半女」が出る、ということの詳しい内容が知りたいのであるが、その面の情報は先の拙稿（藤崎2011刊行予定）にも記し通り不明である。

今回の分析で筆者のいえることは、少なくともシャイアンの社会では先のステレオ

タイプの理解は成立しないだろうということだけである。

#### 文献

- 藤崎康彦 2009a 「モハーベのアリハ（ベルダーシユ）」 跡見学園女子大学文学部紀要 第四十二号
- 2009b 「男が男を生む—イニシエーションとジェンダーの研究—」 跡見学園女子大学 「人文学フォーラム」 第七号
- 2009c 「ベルダーシユの本質再考—モハーベのアリハなどの考察を通して—」 跡見学園女子大学文学部紀要 第四十三号
- 2010 「栃木県川俣の「元服式」の意味—「若衆組」とイニシエーションの観点から—」 『コミュニケーション文化』 第四号
- 2011（刊行予定） 「平原インディアンのベルダーシユの一考察—シャイアン族の「半男半女」について—」 跡見学園女子大学文学部紀要 第四十六号
- Grinnell, G. B. 1920. *When Buffalo Ran*. Yale University Press.
- 1923a, *The Cheyenne Indians*. Volume One, Yale University Press.



- (Reprinted 1972. by University of Nebraska Press.)
- \_\_\_\_\_. 1923b, *The Cheyenne Indians*, Volume Two, Yale University Press. (Reprinted 1972. by University of Nebraska Press.)
- Hoebel, E. A., 1960, *The Cheyennes*, Holt Rinehart and Winston.
- Llewellyn, K. N. & E. A. Hoebel, *The Cheyenne Way*, University of Oklahoma Press.
- Pritzker, B. M., 2000, *A Native American Encyclopedia*, Oxford University Press.
- Straus, A., 1994, 'Northern Cheyenne Kinship Reconsidered,' in *North American Indian Anthropology*, pp.147-71, edited by Demalle, R. J. & A. Ortiz, 1994, University of Oklahoma Press.
- ファン・クネップ, A. 1977 『通過儀礼』 弘文堂
- Wishart, D. J. ed., 2007, *Encyclopedia of the Great Plains*, University of Nebraska Press.